第Ⅱ章

発達の段階に応じた性に関する指導の目標及び指導内容

発達の段階に応じた性に関する指導の目標及び指導内容

学校において、性に関する指導を進める場合、子どもの発達の段階の特徴や性に関する発達課題を明らかにし、その上で、学校における性に関する指導の基本目標を踏まえ、各学校の性に関する指導の目標を設定し、指導内容を決定する必要がある。

近年、子どもの心身の発育・発達の促進化や、子どもを取り巻く性に関する情報などの環境の変化により、性に関する発達課題も変化し、また、個人差が一層大きくなっている。各学校における性に関する指導の目標の設定や指導内容の選択等に当たっては、このことにも十分配慮することが大切である。

1 幼稚園・認定こども園における性に関する指導の目標及び指導内容

⑴ 性に関する指導の目標

幼児期は自我が芽生え、他者の存在を意識できるようになる時期である。また、大人や友達との関わりの中で、幼児同士が互いに自分の思いを出し合い、折り合いをつける体験を重ねることを通して、きまりの必要性などに気付き、自己抑制ができるようになる時期でもある。

したがって、幼稚園・認定こども園における性に関する指導の目標は、幼稚園教育の趣旨を生かすとともに、第Ⅰ章に示した学校教育における性に関する指導の基本目標に則して、次のように設定することができる。

① 自分の誕生や自分の体の仕組みと働きについて知り、男女の違いを正しく受け止めるとともに、自分の誕生の尊さや、体や命の大切さを感じ取ることができるようにする。
② 男女にはそれぞれ違いがあるが、どの友達も同じように大切であることを知り、友達を思いやる心情や態度を育てる。
③ 家族は互いに役割を分担し、助け合って生活していることに気付くことができるようにする。
④ 身近な動植物に親しみをもって接し、命の誕生や終わりといった生命の営みを経験することができるようにする。

⑵ 性に関する指導の内容

幼児期は、大脳皮質が急速に組織化され、ほぼ完成に近づく重要な時期であるが、性に関する発達の過程は未分化である。最も身近な親子関係を中心とした家庭や幼稚園・認定こども園という場の人間関係を基本に、他人との関係を認識し、自我意識を育み、知的能力を高め、社会的行動力を身に付けていく時期である。また、この時期の体験は原体験として生涯にわたる人格形成に大きな影響を与えると言われている。

したがって幼児期の性に関する指導は、発達課題を的確に把握し、幼児理解を深め、直接的、具体的な体験を通して、適切な指導や支援を行う必要がある。

ア 体の発育・発達との関わり

身体計測、衣服の着脱、排泄場面等の事象を捉えて、男女の体の違いに気付かせるとともに、排泄の習慣やエチケット、体や性器の清潔保持の習慣を身に付けさせる必要がある。

イ　心理的な発達との関わり

大人になると、体つきが変わることや自分も少しずつ成長していることを伝える必要がある。また、動物の飼育を通して、命の誕生や終わりといった生命の営みを経験したり、自分や友達の弟妹が生まれる経験をしたりして、赤ちゃんは父親と母親がいて生まれることに気付かせるとともに、命の誕生の素晴らしさを伝え、自分も父母を通して生まれてきた、かけがえのない存在であることを感じさせることが大切である。

ウ　男女の人間関係との関わり

日常の保育を通して、みんなで仲良く遊ぶためには、ルールや約束事を守り、時には我慢したり、助け合ったりすることが大切であると気付かせることが重要となる。

また、男の子だから、女の子だからと区別するのではなく、お互いのよさに気付き、仲良く助け合っていくことが大切であると知らせる必要がある。

エ　家庭や社会との関わり

誕生会などを通して、自分が家族みんなから愛され、育まれていることを繰り返し伝えていくことで、「自分はかけがえのない存在なのだ」という自己肯定感を高めていくことが大切である。また、家族は男女にかかわらず互いにできる仕事を分担し、助け合って生活していることに気付かせ、自分も家族の一員として協力しようとする心情を育てることが大切である。

一方、幼児が凶悪犯罪の被害者になる事件が急増しており、その動機が性的欲望の対象となる事例も多いことから、性被害から幼児を守ることが重要な課題となっている。

このため、家庭と連携しながら、有害情報から幼児を保護するとともに、家庭や地域、関係諸機関と連携し、安全な環境の確保に努め、幼児に対して、世の中には自分たちを誘拐したり、危害を加えたりする人がいることを伝え、「知らない人にはついていかない」ということを繰り返し指導する必要がある。

さらに、周りの人の気持ちを考えて、嫌がることをしてはいけないことも知らせる必要がある。幼児の言動を捉え、テレビやマンガで見たことは現実ではないものもあることに気付かせ、見たことを真似て、人が嫌がることを言ったり、したりしてはいけないことを知らせていく必要がある。

2 小学校における性に関する指導の目標及び指導内容

(1) 性に関する指導の目標

小学校教育は6年間という長い期間であり、生涯の中でも心身の発育・発達の変化の著しい時期である。そのため、性に関する指導の目標も、学校教育における性に関する指導の基本目標を受けて発達の段階ごとに示す必要がある。

① 生命の誕生及び心身の発育・発達における男女差や個人差に関する基礎的事項を理解するとともに、自己の性を受容し、自分を大切にしようとする心情や態度を育てる。
② 男女には体の特徴や発達の段階などに違いがあるが、互いに相手の人格を尊重し合うことが大切であることを知り、相手を思いやる心情や態度を育てる。
③ 家庭における役割は、男女の別なく分担し、互いに助け合うことが大切であることを知り、家庭や社会の一員として適切な判断や意志決定ができる能力や態度を育てる。

ア 低学年における目標

① 男女の体の違いに気付くとともに、自分は父親と母親から生まれ、愛情と保護によって育てられたことを知り、自分を大切にしようとする気持ちを育てる。
② 男女の体には違いがあるが、人間として共に大切な存在であることを知り、男女の別なく仲良くしようとする態度を育てる。
③ 家族は互いに助け合って生活していることに気付き、家族の一員として協力していこうとする態度を育てるとともに、性被害が起きている現状を知り、被害を防ぐ方法を身に付けさせる。

イ 中学年における目標

① 体のつくりや働きを理解するとともに、男女の体の違いや発達の特徴を知り、互いに尊重し合う態度を育てる。
② 男女が互いの違いやよさに気付き、互いに相手を尊重し、男女仲良く協力する態度を育てる。
③ 家庭の機能について理解し、家庭における自分の役割を自覚して行動する態度を育てる。また、性情報を正しく受け止め、適切に行動しようとする態度を育てる。

ウ 高学年における目標

① 心身の発育・発達には男女や個人によって違いがあることを知るとともに、生命の連続性や人の誕生について理解し、自他の生命を尊重する態度を育てる。
② 異性に対する心は男女に違いがあることを知り、互いを尊重し、よりよい男女の友達関係を築こうとする態度を育てる。
③ 家庭や社会における男女の役割について考え、固定的な性役割にとらわれず男女が協力することの大切さを知るとともに、性情報や性被害、エイズに関することなどについて認識を深め、健康で安全な生活を営む態度を育てる。

⑵　性に関する指導の内容

ア　体の発育・発達との関わり

低学年	男女の体の違いに気付かせ、自分や相手を大切にしようとする心情や態度を育てることが大切である。また、人間の体にはいろいろな器官があり、それぞれが大切な働きをもっていること、性器は大切な器官であり、清潔にすることが大切であることを理解させる必要がある。
中学年	体の発育・発達の仕方や体つきには男女や個人によって違いがあることを知らせ、精通、月経の仕組みなどについて正しく理解させる必要がある。また、女子に対しては初経に対する心構えや月経の手当の仕方を習得させるとともに、男子に対しては精通に対する心構えをもたせるなど、生活上の配慮について理解させる。
高学年	思春期の体つきの変化や心身の発育･発達には男女や個人差によって違いがあることを理解させ、心理的な安定を図ることも大切である。特に、女子の場合は、初経への対応や月経に関する不安の解消についてきめ細かく指導する必要がある。また、男子は精通を経験することもあり、心理的に不安定になることもあるので個別指導が必要な場合もある。妊娠する仕組みとして、男女の性交については扱わない。

イ　心理的な発達との関わり

低学年	動物の飼育や植物の栽培を通して生命の大切さを知らせるとともに、自分は父親と母親によって生まれ、愛情と保護によって育てられてきたことに気付かせることが大切である。
中学年	家族や友達との関係を通して、自己を見つめ、他人を思いやる心を育てることが大切である。また、自分のよさや他人のよさに気付かせ、他人へのいたわりや思いやりの気持ちを育てるとともに、生命の誕生について理解させて自分の生命を大切にしようとする態度を育てる。
高学年	体の成長や思春期における心の変化について理解を深め、不安や悩みを解消させる必要がある。また、男女の体の特徴について理解させ、自他の生命を尊重する態度を育てることが大切である。

ウ　男女の人間関係との関わり

低学年	男女が互いに仲良くし、助け合い、自他を大切にしようとする態度を育てることが重要である。このことは、将来の男女の人間関係の基礎を培う上で大切である。
中学年	男女が相互に理解し合い、好ましい異性観や性意識を形成していくことが大切である。男女には体や物事に対する感じ方や考え方に違いがあるが、人間として同じであると理解させ、性別にこだわらず、互いに理解し合い仲良く協力していこうとする態度を育てることが重要である。
高学年	思春期になると異性に関心をもったり、親しくしたいという気持ちが生まれたりすることがあることを知らせるとともに、人には感じ方や考え方に違いがあることを理解させ、多くの友達との関わりの中で、相手の立場や気持ちを尊重しながら、よりよい男女の人間関係を築いていくことが大切なことを理解させる必要がある。

エ　家庭や社会との関わり

低学年	固定的な性役割に偏ることなく、家庭には様々な役割があり、家族が助け合って生活していくことを理解させるとともに、家族の中の自分の役割を知り、自分も家族の一員として役割を分担していこうとする態度を育てることが大切である。また、生活の場が広がって、行動範囲が拡大し、それに伴って性被害に遭う危険性も増えるため、性被害の防止についての指導が大切である。児童に誘拐や性被害があることを知らせ、それを避けるために基本的な行動や態度を身に付けさせる必要がある。
中学年	様々な家庭の形や、家庭によって異なる家族の役割を理解し、家族や自分の役割について考え、自分も家族の一員としての役割を果たそうとする態度を身に付けさせることが大切である。また、マンガやテレビ、インターネットに接続できる携帯型ゲーム機等から得る有害な性情報や暴力等の場面についても考えさせ、これらに対する批判的な心や態度を育てる必要がある。
高学年	男女の役割は固定的なものではないことを理解させるとともに、互いに男女のよさを認め合い、互いができる仕事を分担し、協力して生活していく態度を身に付けさせることが大切である。また、性被害の実態を知らせ、被害を避けるための態度や行動を身に付けさせる必要がある。なお、何気ない言動が相手を傷つけることを知らせるとともに、いじめや性差別に対する人権感覚の基礎を養うことが大切である。さらに、有害な性情報などについて理解させるとともに、家庭と協力しながら性の商品化や人権について、適切に指導する必要がある。特に、人権に関してはエイズに対する偏見や差別が依然として存在していることから、エイズという病気を理解させ、エイズについて偏見や差別をもつことなく、正しい判断ができる能力と態度を育てることが大切である。

3 中学校における性に関する指導の目標及び指導内容

⑴ 性に関する指導の目標

中学生期は、心身の発育・発達が最も急激に表れる時期であり、人格形成において一生の中でも重要な位置を占める時期である。この時期にいかに自己を受け止めるか、生きていく上でどのような行動の指針を形成するかは、自己の生涯に大きな影響を与えることになる。そして、自己をどのように受け止めるか、どのような価値観をもつかということは、男性として又は女性としての自己や他者をどのように理解するかによって大きく左右される。

このような中学生期の特性を踏まえ、第Ⅰ章で示された学校教育における性に関する指導の基本目標に則して、中学校の性に関する指導の目標を次のように設定することができる。

① 心身の発育・発達や変化など人間の性の成熟について科学的に理解するとともに、発達途上にある自己の性を受容し、自他を大切にしようとする心情や態度を育てる。
② 男女の心身の特質を基に男女が互いに相手を理解し、人格を尊重する心情や態度を育てる。また、望ましい人間関係を築いていくため、より適切な意志決定に基づく行動選択ができる能力や態度を育てる。
③ 男女の生き方は多様であることを理解し、家庭や社会における期待される役割や自己の将来の生き方について考えるとともに、社会における性的な事象を見つめて、家庭や社会の一員として適切な判断や意志決定、行動選択ができる能力や態度を育てる。

⑵ 性に関する指導の内容

ア 体の発育・発達との関わり

人は思春期になると成人の体へ変化していく。その男女の体の発育・発達には男女や個人によって違いがあることを理解させ、不安や悩みを克服させる。また、思春期における体の変化は心理的な問題に深く関係していることから、人間関係における配慮も必要であることを理解させる。

中学生になると、ほとんどの生徒が初経や精通を経験する。そこで、この時期に自己の性だけではなく異性についても、その生殖機能と発達の仕組みについて理解させる。それが自他ともに尊重するという人間観の基盤を築く基礎的な情報となる。また、性衝動に関わる悩みの解消や克服を図る必要がある。

生殖の仕組みと生命誕生の経過を理解するとともに、自他の生命を尊重する態度を育てる。併せて、性行動についての理解を深める。なお、性行動については、男女の人間関係の問題であるので、月経、射精、性衝動及び生命誕生の理解を深めた上で、男女の人間関係の題材で扱うことが望ましい。

イ 心理的な発達との関わり

中学生期は、自我の目覚めとともに、心理的離乳へ向かう多様な心理的変化が見られる。保護者や教師への反抗、承認欲求、自己顕示欲、自信と不安が入り混じった感情、理想と現実の中での葛藤、仲間との強い連帯感、自己の容姿へのこだわりや異性への関心など感情の起伏が激しく、心理的安定を図る必要がある。

また、心理的に不安定な状態になりがちな時期でもあり、性に関する不安や悩みへの対処や克服のための支援や相談活動が必要となる。

中学生期は性的成熟に伴い、性衝動による異性への関心や接近欲が高まることを知らせ、性に対する健康で肯定的な概念形成や社会に適応する適切な性行動等について、理解を深めさせる必要がある。

ウ　男女の人間関係との関わり

男女の人間関係は、その成り立ちによって多様であることに気付かせる。人の一生においては、友人、恋人、サークルやクラブの仲間、職場の同僚、地域の人々など様々な男女の人間関係があることを理解させる。そして、それぞれにおいて豊かな人間関係を築くためには、人間尊重や男女平等を基盤とした関係が重要であることに気付かせる。また、性役割における性差別等の学習と関連させて、男女の人間関係は相手との間柄やその時の状況によって様々な在り方が考えられることを理解させる。

男女の人間関係には過程があり、その過程において互いの人格を尊重し、相互理解を深めていくことが大切であることを気付かせる。また、そのためには、人の愛情の表現や感じ方は、相手との関係や自己の置かれた状況によって多様であることを知らせ、自分勝手な考えや感情から相手に嫌な思いをさせたり、困らせたりしないことが大切であり、エチケットやマナーが必要なことを理解させる。

人間の性行動が多様であることを知らせ、そこには心の働きが深く関わっていることを理解させる。

エ　家庭や社会との関わり

旧来の固定的性役割観が今もなお、男性観、女性観、家庭観、職業観、人間関係等に影響を与えている場合があることを理解させる。

時代によって家庭の形や役割も変わっている。現代社会の多様な家庭の形にも配慮しつつ、男女の人間関係の歴史的経緯について考えさせたり、家庭や学校生活における男女の役割など、身近な生活の場から広く社会にまで目を向けさせ、社会的視野を育て、社会における自分の役割や将来の生き方について考えさせる。男性も女性も互いを認め合い、協力しながら、それぞれの個性と能力を発揮して様々な活動に取り組み、その責任を共にもつことなどについて、生涯にわたってよりよく生きていく上での基礎を築かせる。

中学生期の性心理や性行動､性に関する価値観の形成等にマスコミからの情報の影響はきわめて大きい。また、インターネットの発達により、アダルトサイトや出会い系サイト、SNS などを介して、生徒がより簡単に性情報に触れたり、異性と知り合うことができるようになった。そこで、マスコミやインターネット上の性情報には、営利目的だったり、興味本位であったり、悪意のある内容が含まれている場合があることを理解し、自分のこれまでの認識を見直すとともに、情報に対する適切な選択能力と行動力を身に付け、人間の性への正しい認識を深めさせることが大切である。

性感染症と、性感染症としてのエイズに関する知識を正しく理解し、エイズ患者等に対する偏見や差別をもつことなく、正しく行動しようとする態度を育てることが大切である。

中学生期は、性的成熟が一層進み、性的対象として性被害に遭うことが多く見られる。また、多様な性情報に刺激されたり性加害者になったりすることもある。このような時期に性被害、性加害の防止について扱う必要がある。

十代における性交に関する意識や態度は、男女ともに寛容な傾向が見られる。その結果、性感染症の感染や望まない妊娠などの問題が生じることがある。また、中学生においても性風俗産業に接近したり、援助交際等の性の逸脱行動に走ったりする生徒もいる。売春は法的にも倫理的にも許されないことや予測される不幸な事態について理解させる必要がある。

さらに、自分自身を肯定的に受容し、かけがえのない存在として大切にするとともに、人間としての倫理観や規範意識について、自分なりの意見や態度が形成されるよう指導することが大切である。

4 高等学校における性に関する指導の目標及び指導内容

⑴　性に関する指導の目標

高校生の時期は、体の発育・発達には個人や男女によって違いが見られるが、高校生の後期にはほぼ成人と変わらなくなり、性機能も成熟して、心理的な発達も著しくなる。自分の生き方や社会との関わり方について真剣に考え始めるのもこの時期であり、自分を知り主体的な判断や行動ができるようになることが重要である。

このような高校生の特性を踏まえ、第Ⅰ章で示した学校教育における性に関する指導の基本目標に則し、高等学校における性に関する指導の目標を次のように設定することができる。

① 心身の発育・発達や変化など人間の性の成熟について理解を深めるとともに、それらを総合的に理解し、自他の性に対する認識を深め、人間としてより適切な行動を選択しようとする態度を育てる。
② 男女の心身の特質と人間としての平等性について認識を深め、男女が互いに人格を尊重する心情や態度を育てる。また、将来を見通して、望ましい人間関係を築いていくため、より適切な意志決定に基づく行動選択の能力や態度を育てる。
③ 社会における自己役割と責任について自覚を促すとともに、将来の生き方について自分の考えを確立する。また、性の文化や社会的な意味を理解するとともに、男女平等、人間尊重の精神を基盤とする性の望ましい価値観を確立し、適切な意志決定や行動選択ができるようにする。

⑵　性に関する指導の内容

高校生になると、体の発育・発達や性的な成熟度はほぼ完成に近づくが、発育の仕方や発達の程度には男女差や個人差が見られる。したがって、これに伴う不安や悩みを解消できるように支援することが必要である。特に、性衝動については、身体的な面からだけではなく、社会的な性の風潮による影響も考えられるので、自分の成長の過程を理解するとともに、これらの状況を適切に見極める判断力が必要になる。

ア　体の発育・発達との関わり

体の発育･発達について総合的に理解させるとともに、個人差があることを十分認識させる必要がある。

イ　心理的な発達との関わり

自分や異性の成長の過程をよく知り、男女の生理的、心理的な違いを理解するとともに、健康で望ましい性への価値観を確立する必要がある。併せて、一人の人間としての在り方、生き方を重視した指導も必要である。

ウ　男女の人間関係との関わり

男女の人間関係の在り方を考えるには、男女の相互理解が大切である。男女の生理的、心理的な違いについて正しく理解させ、男女は互いの人格を尊重し合わなければならないことを認識させる必要がある。自分の性をどう受け止めるかが、その後の生き方や行動形式を左右していくことから、互いに異性の人格を尊重し、思いやりのある態度がもてるように指導する必要がある。

また、男女の好ましい人間関係を築く上で、人間尊重や男女平等の精神に基づき固定的な性役割や性観念にとらわれないことも大切である。特に、この時期は、異性に対する関心が高まり、恋愛感情が芽生え、単なる仲間というだけではなく、特定の異性と親しくなりたいという欲求が高まることがある。

このため、男女の人間関係には多くの過程があり、その過程が大切であることを理解させる必要がある。さらに、デート DV が社会問題として取り上げられており、思春期の特徴的な心理や性意識や性行動が影響している。デート DV は、若い男女が親密な関係になったとき、支配と暴力が顕在化したり、ひどくなったりするのが特徴である。

こうしたことから、男女が互いの立場や考えを尊重し合い、自分の意志を相手にはっきりと伝えられる自立した男女の人間関係を育てるとともに、性行動に対する賢明な意志決定や行動選択の能力や態度を身に付けさせることが重要である。

エ　家庭や社会との関わり

近い将来、社会を担う一員として、結婚や次の世代を育てる場である家庭について、固定的な性役割観にとらわれることなく、パートナーの個性を理解し、人格を尊重する関係を築くことが大切であることを理解させ、自分なりの結婚観や家庭観がもてるようにさせることが重要である。

家族計画の意義や避妊法について理解し、望まない妊娠を避けるための適切な行動を選択する態度を身に付けさせるとともに、人工妊娠中絶が心身に与える深刻な影響を理解させる必要がある。なお、避妊の指導においては、性交を助長することのないよう配慮する。

性と人権に関しては、国が目指す男女共同参画社会の形成のため、人間尊重、男女平等の精神が性に留まらず、社会生活を送る上での基礎･基本であるという認識を徹底させる必要がある。また、セクシャル･ハラスメントなど、自分に意識がなくても相手が不快に感じれば、性の差別や偏見になる場合があることも理解させておく必要がある。

エイズに関しては、誤った知識や情報によって、エイズに感染した人に対する不当な偏見や差別が起きている現状を認識させる必要がある。エイズの歴史的な背景や現状について認識させるとともに、感染経路や予防について正しく理解させることが大切である。

現代社会は高度情報通信社会と呼ばれ、気軽にインターネットに接続し、多くの高校生が SNS を利用している。そのため、性に関する観念やモラル、価値観が変化し、多様化している状況にあるが、性情報を適切に見極め、性に関する様々な社会事象に対して主体的に判断ができる能力や態度を身に付けさせる指導が必要である。

5 障がいのある児童生徒に対する性に関する指導の目標及び指導内容

障がいのある子どもの性に関する指導の目標や指導内容は、基本的には障がいのない子どもの目標と同じものであるが、障がいの種別やその状態に応じて目標を設定するとともに、個に応じた課題が達成できるよう、障がいの状態等に応じた指導内容の選択やコミュニケーションの手段、教材や教具など指導方法の工夫に努めていく必要がある。

⑴ 性に関する指導の目標

障がいのある児童生徒の性に関する指導の目標は、障がいのない児童生徒の目標と同じである。しかし、その障がいの状態や程度に応じて、障がいによる困難を改善し、共に生きる社会の一員としての自覚を高め、社会的自立を促すように進めることが大切である。このため、障がいのある子どもに対する性に関する指導の目標は、障がいの種別やその状態に応じて設定する必要がある。

⑵ 性に関する指導の内容

障がいのある児童生徒に対する性に関する課題は、基本的には障がいのない児童生徒と同様である。したがって、指導内容も他の学校種に準じたものになるが、障がいの状態によっては、身の周りのこと等を自分で行うことが困難であったり、判断力が十分に育っていなかったりすることなどから、自分の力を発揮できない子どももいる。障がいのある子どもに対する性に関する指導は、障がいの状態や特性及び学校の実態に即して、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、さらには自立活動等の日常活動にも組み入れ、個別の指導計画と関連を図りながら、個に応じた課題が達成できるように指導する必要がある。また、障がいの種別やその程度に応じて、コミュニケーションの手段や情報の伝達方法に工夫が必要であり、教材や教具についても十分に配慮する必要がある。

ア 体の発育・発達との関わり

知的発達に障がいのある場合には、自他の性の認識が難しかったり、身辺処理の面で課題があったりすることがある。また、性について強い関心をもっているのではないかと誤解されたり、性的な被害者、加害者になったりすることがある。これらを踏まえて、障がいのない子どもの学校種別における指導内容を基本に、子どもの障がいの状態に応じて指導内容を選択する。

イ 男女の人間関係との関わり

男女の人間関係のうち、性に関する発達課題は、基本的には、障がいのない子どもと同じであるが、障がいの状態や程度により異なる。このため、学校種別の指導内容に基づいて指導を進めることになるが、自己表現がうまくいかず、相手に誤解を与えたり、相手との適切な距離感を取れず不適切な行動をとってしまったりする子どもの指導に当たっては、十分配慮する必要がある。

ウ 家庭や社会との関わり

障がいのある子どもは発達の段階や障がいの程度に応じて、将来にわたって自己実現が図れるよう、男女の役割や責任、生き方などについて考え、男女が互いに尊重し合い、認め合う心情や態度を育てることが大切である。また、障がいの程度にかかわらず一人一人の子どもが自分や他者のかけがえのない命を大切にし、たとえ失敗したとしてもやり直せると感じられるよう自己肯定感を高めていくともに、障がいのある子どもが困ったときに周りに相談したり、悩みを打ち明けられたりするような力を育てていくことも大切である。

⑶　障がいの特性に関する配慮事項

障がいのある子どもの性に関する指導を進めていくには、各障がいの特性等を十分に踏まえた上で指導内容の選択や方法を考慮していく必要がある。障がいは単一で現れる場合もあるが、重複している場合もあり、障がい別の配慮事項と共に必要に応じてその他の障がいの状況も考慮していくことが必要になる。

なお、特別支援学校や特別支援学級では、知的発達が未分化な子どもに対して各教科や領域に分けて指導するよりも、教科等を合わせた指導を行う方が学習効果の上がる場合がある。性に関する指導を進めていく際にも、各教科や領域で指導するほか、子どもの実態を考慮して、教科等を合わせた指導の形態である「生活単元学習」などで指導していくことも考えられる。

ア　難聴

難聴がある子どもは、聴覚からの情報が少ないことから、状況や場面によって言葉のもつ細かなニュアンスの違いなどの理解が難しいことがある。コミュニケーションの方法として、携帯電話やインターネットの活用が多くなるに伴い、得られる情報量が増加しているが、特に性に関する情報については、安全に正しい情報を活用できるマナーやスキルを身に付けられるよう配慮することが必要である。

教材選択に当たっては、目で見て分かるビデオソフトなどの視聴覚教材が有効であるが、子どもの発達の段階や実態に応じて、分かりやすい言葉で情報を補うなど、言葉の理解への配慮が大切である。

イ　知的障がい

知的障がいのある子どもに対する性に関する指導は、子どもの障がいの状態や特別支援学校、特別支援学級等の実態を考慮し、人格的発達を促していくための教育活動の一環として、全教育活動を通じて体系的・計画的に行う必要がある。特に、性に関する指導を通して、日常生活の基礎的・基本的事項について身に付けることができるようにするとともに、自己の性についての認識や、他者への認識を深めることが大切である。さらに、子どもの心身の発育・発達に応じて、社会性や男女の豊かな人間関係を育て、生命の尊さに気付き、将来を積極的に生きていこうとする意欲や態度を育てることが重要である。

教材選択に当たっては、理解力に個人差が大きいため、個に応じた多様な教材を準備することが求められる。絵図や模型、視聴覚教材などできるだけ子どもが理解したり、イメージしやすいように具体的な教材を用いたり、独自に教材を開発したりするなど工夫する必要がある。

ウ　肢体不自由

肢体不自由のある子どもの中には、日々の活動範囲が限られてしまうことで、社会経験の少ない子どもがいる。また、身体に障がいがあることによって、自分自身の障がいの理解や受容ができず、自己肯定感をもてなかったり、自己の体の発達や変化を理解したり受け入れたりすることに大きく影響する。そのため、悩むことや常に介助されることに対して、将来への不安をもち、社会へ出ていくことに消極的になることもあり、子どもの悩みや葛藤を予測し、それを乗り越えるための指導･支援をすることが必要である。

教材選択に当たっては、視聴覚教材やコンピュータ等を積極的に活用し、経験の不足や偏りを補ったり、子どもが自分で操作をして体験できるように表記や表現が適切な教材・教具を工夫したりして、学習効果を高めていくことが大切である。

エ　病弱・身体虚弱

病弱・身体虚弱の子どもの中には、自己の身体の発達や体の発育、変化、病気そのものについての不安や悩みとともに、将来への不安をもつものが多い。一人一人の病気の状態や発達の段階等を踏まえ、必要に応じて医療機関と十分に連携しながら、子どもの悩みや葛藤を考慮することが必要である。また、入退院が多い子どもに対しては、個別の指導に一貫性を保つことができるよう、前籍校との連携を図るなど、継続的な指導が行われるよう配慮することが大切である。

教材選択に当たっては、運動制限がある子どもについては、既製の教材や教具に改良を加えて使いやすくし、身体面の負担を少なくして、意欲的、効果的な学習ができるようにすることが必要である。また、視聴覚教材やコンピュータ等を積極的に活用し、経験の不足や偏りを補ったり、自分で操作をして体験できるように表記や表現が適切な教材・教具を工夫したりして、学習効果を高めていくことが大切である。

オ　自閉症・情緒障がい

自閉症のある子ども等は、他人との意思疎通や対人関係形成の困難さなどがあることから、他人の考えや気持ちを理解するなどして、友達関係や信頼関係を形作ることなどが難しいことが多い。異性との関わり方など、場面に応じた実際的な体験の機会を多くするとともに、分かりやすい言葉で具体的な行動等の意味を理解できるようにしていくことが必要である。また、情緒障がいのある子ども等は、選択性かん黙等のために集団生活への参加や社会的適応などに困難さがあることから、他者からの働きかけを適切に受け止められないことがある。必要に応じて医療機関等と連携しながら、心理面での不安定さに十分配慮することが必要である。

教材選択に当たっては、自閉症の特性を考慮し、視覚を活用した情報（写真や図面、模型等の活用）を提供するなどの工夫をする必要がある。

カ　弱視、言語障がい、学習障がい、注意欠陥多動性障がい

以下の障がいの特性については学校種ごとの指導内容に基づくが、障がいの状態や特性等を踏まえ、次の点などに配慮して指導することが大切である。

○弱視
- 状況等の丁寧な説明など、視覚情報が得にくいことに考慮する。
- 拡大コピーや拡大文字を用いた資料など、見えにくさに応じた教材及び情報の提供を行う。

○言語障がい
- 教科書の音読など、発音のしにくさなどに考慮する。
- 発音が不明瞭な場合には、筆談など代替手段によるコミュニケーションを行う。

○学習障がい
- 「読む」「書く」等、特定の学習内容の習得が難しいので、学習内容の配分に軽重を付ける。
- 読み書きに時間がかかる場合、振り仮名を付けたり、絵図、マークなどを工夫したり、障がいの状態に応じて配慮する。

○注意欠陥多動性障がい
- 学習内容を適切な量にするなど、注意の集中を持続することが苦手であることに考慮する。
- 聞き逃しや見逃し、書類の紛失等が多い場合には伝達する情報を整理して提供する。